

平成 27 年度 学校評価（自己評価）

I. はじめに

学校における最も重要な項目は、**園児の育ち**と、その為の**教師力の向上**にあると考える。それ故、学校評価の初年度である**平成 20 年度**は、大きくはその 2 点に絞り、学校評価を行った。さらに、保護者の生の声を参考にしたいということから、**平成 21 年度**と、**平成 26 年度**においては、**全保護者にアンケート**を実施し、その結果を基に学校評価を行った。**本平成 27 年度**は、安松幼稚園の教育全般に対する理念・考え・取り組みと共に、特別支援教育をテーマの一つとし、どの程度達成されているかの学校評価（自己評価・学校関係者評価）を行う。

II. 本年度の学校評価の項目として、特別支援教育をテーマの一つに選んだ理由

安松幼稚園の教育は、情緒教育そのものである。そして安松幼稚園が考える教育全般に対する理念・考え・取り組みは、細かな配慮をより必要とする障害児をも含む、全ての園児にとって必要であり有効であると考えている。もちろんそれぞれの障害についての専門的な知識は必要であるが、特別支援教育という特異な領域があるわけではなく、子供たちの**心の育ち・人としてのあるべき姿・もの事に対する感受性を高め豊かにする**という点において、安松幼稚園の情緒教育は、特別支援教育をも含んだ教育全般において大切にされるべきだと考えるからです。以上の観点を中心として自己評価を行い、その上にたった学校関係者評価をお願いする次第である。

III. 本園の教育（II で記したように、例えば、先生から子供個々への声かけは障害児も含む全ての園児に対してされなくてはならないように、特別支援教育という特別な教育があるわけではない。その意味で、安松幼稚園における特別支援教育は、一般的な教育全般における理念・考え・取り組みの同一線上・延長線上にあると考えられる。それ故、先ずは当園の教育全般に対する考えを整理する。）

- 安松幼稚園の教育は情緒教育そのものである
歌唱などの音楽・美術等の芸術も情緒教育そのものであり 身体を動かす体育なども子ども達の感性を豊かに瑞々しくしてくれる。俳句、時には和歌 論語や吉田松陰の和語などの古典も 情緒を大きく育てます。
また、日常のあらゆる場面における先生と園児との会話も、子供の情緒の涵養につながっていることを忘れてはならない。

IV. 安松幼稚園が考える教育の本道（安松幼稚園の教育全般に対する理念・考え・取り組み）

- 教育とは、子供の周りから困難や障害を取り除くのではなくて、それらを乗り越える力をつけることである。
- その為には、個々の子供をきめ細かく観察し、その子供に合った負荷をかけなくてはならない。負荷を乗り越える経験こそ、人としての育ちにつながり、ここを離れての教育はあり得ない。
- 先生の子供への 本気で真剣な関わり そして 先生と子供との心からの触れ合いや信頼関係が、子供の力を引き出すのである。
- ★ 教育の神髄は、「子供に教え込む」のではなく、「子供から引き出す」ことにある。先生が本気で真剣に子供と触れ合うと 子供は必ず力いっぱい返してくる。このようにして 子供の隠されている資質・能力・力を引き出すことが出来る。これこそが安松幼稚園が実践している教育です。
Education には、「人が身につけるにいたる過程」の意があり、ラテン語 educe は、「隠れた才能・能力などを引き出す」という意である。

もう少し具体的に、

安松幼稚園が目指す教育と 対極にある子供児童中心主義とを 対比してみる

★安松幼稚園の考える教育の本道

- ・型、基本を大切に、時には強制も必要 ←→
- ・先生、親の凛とした姿勢（ユーモラスな会話やとことん抱きしめ誉めることも含む） ←→
- ・困難、障害を乗り越える力をつけたい ←→
- ・先生と子供との真剣な関わり ←→
- ・我慢し辛抱する経験も大切 ←→
- ・ちょっとした失敗の経験も必要 ←→
- ・相手のことを思いやる心を育てつつ適度な競争や切磋琢磨は必要 ←→
- ・教育は指導 ←→
- ・教え込みではなく、子供の発達段階を考え、子供との会話や触れ合いを通じ子供から引き出すことが大切 ←→

★子供児童中心主義

- ・子供の自由にしたいようにさせる
- ・いかなる場合も、先生・親と子供は友達関係で同じ目線
- ・子供がいやがることはさせず、子供の周りから困難・障害を取り去る
- ・はれ物にさわるような保護主義
- ・子供には我慢や辛抱をさせてはいけない
- ・失敗すると心に傷がつくのでさせてはならない
- ・競争は悪であり、一切させてはならない
- ・教育は支援
- ・子供から先生にはたらきかけるまで、何もせずに待っている

安松幼稚園では、子供は成功も失敗も経験することが必要だと考えている。

失敗して少し傷ついて、それに耐えることを通して、子供は「我慢力」というものを養い、物事に対する「耐性」を身につけていく。これは、障害児であろうとなかろうと、共通する真理である。誤解無きように申し添えるが、心の折れやすい傾向のある障害児に対して、きめ細かな観察がより必要で重要であるのは当然であり、全ての園児を同じように画一的に指導していくということでないのは、自明であろう。

V. 安松幼稚園における特別支援教育

- 上記の考えは、障害児を含む全ての園児を対象にしても真理である。
- ある保護者が、安松幼稚園では「言葉のシャワー」が溢れていると表現されたが、特に障害をもっている園児には、顔を見ながら ゆっくりとしたたくさんの会話を心がけている。
- それぞれの障害の特性を充分理解し、その子供をきめ細かく観察し、障害児の発達段階にあった負荷をかけ それを乗り越える経験は、とても重要である。

まとめてみると

★安松幼稚園では、障害児を含めた全ての園児について

①言葉のシャワー 並びに

②その時の発達段階を細かく観察した上で適切な負荷をかけ、それを乗り越えさせる経験

そして乗り越えていく過程の中で、どんな小さな事でも見つけて、とことん褒めるの2点は、教育の根本と考えている。

★もちろん障害児については、その障害についての基礎知識・より細かい指導・先生の根気が必要なのは言うまでもないが、根本の上記2点は全ての園児に共通する指導理念である。

現在の日本の特別支援教育に関する問題点

- 「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」は、ある視点からは必要である。が、障害児の将来の自立を考えれば、あまりにも個別を重視し過ぎると、集団生活に入っていくチャンスを逃す危険を感じる。安松幼稚園では、個々を大切にし障害の特性を十分に踏まえながらも、集団教育の中で、できる限り育てていきたいと考えている。

■昨今、共生社会の実現という観点から、一人一人に応じた指導や支援（特別支援教育）に加え、障害のある者と障害のない者が可能な限り共に学ぶシステム（インクルーシブ教育システム）を構築することの重要性が指摘されている。

この考えは当園では従来から自明なことであり、今さら……と感じる。安松幼稚園における特別支援教育は、当然ながら、障害のある者と障害のない者が可能な限り共に学ぶシステムの上になつた幼稚園教育を意味する。

ただ、状況により、専門医の判断を仰ぎながら、その子にとって、どの形態が有益であるかを、柔軟に判断することの大切さを忘れてはならない。

■個人をきめ細かく観察し、障害の特性を基本にするのは当然としても、現在の日本の障害児教育は、発達段階にあった負荷をかけることを、躊躇しているように思える。

■2013年に、アメリカ精神医学会の新しい診断基準 DSM-5 において、広汎性発達障害(PDD)のいくつかの症状が、自閉症スペクトラム(ASD)にまとめられてしまった。これに関して、ある問題を感じる。

VI. 安松幼稚園の 教育に対する一般的な理念 並びに 特別支援教育 に関する自己評価

A. 制度的な面

①大学などへの研究会への参加

大学・教育委員会・私学関係の、発達障害に関する研究会に、毎年8回前後、先生の延べ人数では20人前後が参加し研修を重ねている。

②園内研修

様々な種類の発達障害について、書物や専門書を用いて年に10回程度の園内研修を行っている。この中には、①外部の研究会の内容を伝講も含む。

③日常の情報交換

毎日約1時間30分～2時間程度の、園児（当然障害児を含む）の情報交換を行っている。全ての園児、とくに障害児に関する情報や考慮すべき問題点などは、担任一人が背負い込むのではなくて、園の全ての先生が問題意識を共有し、全ての先生による理解・協力・指導が重要である。

A. 制度的な面の自己評価……上記については、十二分になされている。

B. 内容（多岐にわたるので、一、二の例を挙げる）

①会話

個々の子供との会話が、充分になされているか。とくに障害児においては、根気よく先生の口元を見せながらの会話が出来ているか

②観察そして適切な負荷

個々を細かく観察し、子供の実態に合った教材を準備し、色々な局面でその子供にあった適切な負荷をかけているか

③とくに特別支援教育で配慮すること

- ・例えば聞くことが苦手な子供に対して、視覚からの指導を適切に行っているか
またその逆の場合にも、適切に対処できているか
- ・不規則なことについていけない園児に対して、説明が十分になされているか
- ・感覚過敏、逆に鈍麻なケースにおいて、その特性を理解した指導を行っているか
音、光、水や糊そして人の肌など湿気のあるぬるぬるしたもの、臭いや白ご飯、新しい下着・衣服を着る事への抵抗感、靴下
- ・言葉の遅れ、周りの状況の理解の不足、お友達との関係や社会性の欠如、視線視線集中等に関する指導、筋肉系の問題、その他障害に関する知識を多く持ち子供の心の有り様を理解しようとしているか

上記以外多くありますが、ここでは省略します

④障害児ということで、適切に注意し叱ることを避けていないか。

とくに ADHD の園児の行動の3パターンに対する対処法を理解しているか。

発達障碍の専門医である小野次郎先生によれば

好ましい行動→褒める

好ましくない行動→行動を無視し望ましい行動を伝える

許されない行動→即座に叱る（人格ではなく、行動を叱る）とあります。

すなわち、ADHD の特性による行動であっても、わがままからであっても、社会的によくない行動として伝えないといけないことは、きちんと伝えなくてはならない。

子供が許されない行動をしたときは、即座に叱り、よくないことだと伝える。その後、本人なりの思いを聞き心情を理解する。

ADHD に限りませんが、障害児ということで、適切に注意し叱ることを避けていませんか。

注. 発達障碍の専門医である小野次郎先生や田中康雄先生も、「わがままからの行動や人として許されない行動をしたときは、注意し叱らなくてはならない。」と、あまやかしに対して、警鐘を鳴らされています。

B. 内容に関する自己評価……上記の B. 内容は、A. 制度的な面が有効に機能しているので、新任も、徐々に力をつけてきている。また研修により、新しい知識もどんどん吸収しているので、十分に教育効果をあげている。

C. その他

自己評価の会を持った際に、色々と出た意見を付記しておく。

- 入園まで言葉があまり出なかった園児が、先生方の言葉のシャワーにより、目覚ましく言葉が出るようになったという多くの事例
- 集団活動や、言葉の発達を通して、社会性の発達が見られたという事例
- 粗暴で、周りに攻撃的であった園児が、年長さんなど周りのお友達の優しさや、先生の指導により、攻撃性がなくなった事例
- 多動傾向の園児が、色々な体を使っての活動や遊び、また音楽指導を通じて、多動性が減じたという多くの事例
- 座るといことが出来なかった園児には、椅子に座る遊びを通して、また先生の根気強い指導と園児との関わりを通して、座れるようになっていったという事例
- 滑舌の良くない園児に対して、先生が毎日少しずつ大きな口を開け口の動きを見せることにより、かなり改善されたという事例
- 脳梗塞などによる身体障害のある園児に対して、毎日手を取っての歩行やジャンプ、階段の上り下りなどに付き添うことによって、大幅に改善したという事例
- 重度の喘息をもっている子供が、一年を通じての定期的な持久走の結果、劇的に改善されたという事例

等々が報告され、安松幼稚園の教育理念が特別支援教育も含み、十分に達成されていると、自己評価された。

VII. さいごに

今回は、安松幼稚園の目指す 教育全般に係わる情緒教育 そしてとくに 特別支援教育 に関する学校評価を試みた。

それ故、その内容・目標を確認した上でないと、達成できているかどうかの自己評価は困難であったので、自己評価の最初にその点を確認した。そしてこの確認こそが、また先生方の教師力を向上させることにつながった事を評価しておく。

自己評価においては、教育全般 並びに 特別支援教育 共に、目標を十分に達成しているとの評価に至ったが、その点を補強する意味で、特別支援教育において、保護者の感想を4点紹介しておく。（全文ではないが、一部をそのまま抜粋しています）

感想①

体調・発育に合わせて、日々様々な工夫を凝らして、息子に接して頂いたことに対し、理事長先生はじめ、諸先生方に感謝致します。

試行錯誤の繰り返しの日々でしたが、この期間の息子の成長を私なりに実感し、嬉しく思うこともありました。他のお子さんに比べるとまだまだ未熟ですが、息子なりのスピードで着実に身に付いていることを感じ、私達にとって、今後の大きな「励み」となっています。

最近、発達障害に関する本を読んだり、大阪市主催の講演を聴きに行ったりする機会がありました。どちらも今の教育現場で起こっている様々な問題にどう対処すべきか提言されていましたが、その多くが、既に安松幼稚園で実践されていることばかりでした。(効果的な加配保育。保護者との相互理解の重要性、個々人の発達に応じたきめ細かな配慮等)

これらのことを通じて、改めて安松幼稚園にお世話になって良かったと、強く感じました。略

感想②

ある専門医の先生は、「私が診ている安松幼稚園の子ども達は、他園にない伸びをしめしているので、安松に通えている〇〇は、とても恵まれた環境にいる」と、おっしゃっていました。

私も、〇〇が幼稚園に通う中で、目覚ましい成長は感じていましたが、…少し略…病院の検査では、にわかに信じがたい伸び方でした。高機能の自閉症スペクトラムの子にとっては、認知・適応はまだ得意な分野ですが、苦手な分野で9ヶ月も遅れていた言語・社会が、ほぼ現在の月齢までに上がり、またしんどさの象徴であるその差も、大きく縮まりました。

全てのトータルの平均で見ると、94→113となり、半年で19も伸びており、心理士さんからも「10も伸びればよく頑張ったねと誉めてあげたいところなのに、半年ですごい事です。安松幼稚園に通われる子には、こういう結果を出す子がよくいますよ」ということでした。また心理士さん曰く「何より素晴らしいのは、これだけ急激な伸び方をするようなレベルの高い環境なら、これまでの〇〇なら、暴発し問題行動を起こしても不思議でないのに、幼稚園が好きと言って楽しんで行っているとのこと。これは、先生達がよほどに素晴らしいのであって、感謝すべき事です」

またS・T(言語聴覚訓練)で、直接、言語をうながすような内容は、幼稚園でやって頂いているのと、共通していて驚きました。略

感想③

2度の受診(カウンセリング、心理検査)の後、ドクターから、身体的には問題ないが、言葉の遅れの面で、自閉的傾向にあると言われました。

そして併せて、「日々の集団生活から受ける刺激で、言葉がどんどん出てきています。安松幼稚園に通っているなら大丈夫です。あのような児童の個性を引き出せる素晴らしい幼稚園はないですよ。

いい幼稚園、先生に恵まれて良かったですね」とも言われました。

また心理士さんからも同じようなことを言われました。略

感想④

年少の終園式の数日後、保健センターで、半年に1回の発達相談を受けてきました。前回8月末(年少の8月)に受けた時は、総合的な判断として、約1年遅れと言われていました。しかしその時でも、3歳で入園前の発達相談からは、驚くほどの成長ぶりでした。

それが今回、標準に追いついたとのことでした。

それどころか、3歳児終了時点なのに、5歳~5歳半の検査もしてもらい、かなりの項目をクリアできていました。

この結果に、私の驚きはもちろんですが、発達相談の先生も大変驚いていました。

「幼稚園の先生はすごいですね」と、その先生は、そうぼそとつぶやいていました。その言葉に、私は「安松幼稚園だからなんです！！」と、声を大にして言いたかったです。

この発達相談の先生ではありませんでしたが、ある相談員の先生から、入園前に、「〇〇君には、保育所や公立の幼稚園を勧めます」と、言われ続けました。

私は、上の子の時から安松の素晴らしさを知っていたので迷いませんでしたが……。

また和泉母子センターでも、言語療法を受診していましたが、この検診でも、あまりの成長ぶりに、先生は驚いていました。

私は、「安松の先生みんなが、毎日言葉のシャワーを浴びせてくれていること。発音に関してもしっかりと指導してくれていること」を伝えると、先生は「今の生活が十分なトレーニングになっているので、今後の受診の必要は無いでしょう」とまで、言ってくれました。

先生方が日々しっかりと向き合って、言葉のシャワーや発声練習をしてくれているおかげで、〇〇は言葉が増え、自分の意志や感情、時には冗談までも言葉にして相手に伝えることができるようになりました。

本当に感謝しています。

(保護者の感想は以上です)

自己評価の会においては、全ての先生による徹底した話し合いの中で、十分に安松幼稚園が目指す教育目標が達成できているとの結論に至ったが、その傍証として、特別支援教育に関する保護者のお手紙を、一部抜粋であるが、そのままの文で掲載した。

幼稚園は子供が初めて出会う学校ですが、安松幼稚園では、学校について次のように考えています。

学校は教師力で決まる

教師力とは先生の熱意と指導力

そしてこれこそ、**安松幼稚園の依って立つところであり誇り**でもあります。

これら 平成 27 年度 学校評価（自己評価）を、学校関係者委員会に提出し、学校関係者の評価を得たいと考えている。

平成 27 年度学校評価（学校関係者評価）へ続きます。

平成 27 年度 学校評価（学校関係者評価）

I. 最初に

今回、学校関係者委員会に提出された本 27 年度の学校評価（自己評価）は、「安松幼稚園の教育全般について 並びに その中でも特別支援教育」を評価の対象として取上げられていました。学校関係者委員会としての下記の評価に至りましたので、ここに学校関係者評価を提出致します。

II. 先ずは、教育全般についての自己評価の検証

(1)安松幼稚園の教育全般についての理念の検証

自己評価にありますように、

- ・ 障害児に対する多くの言葉かけ
- ・ きめ細かな個々の観察
- ・ 園児の実態、発達段階にあった教育

の重要性は、障害児に対するだけではなく、全ての園児に対しても同様に重要であるという理念を、まず評価致します。

障害に対する基礎知識・専門的な観点は当然必要とおもいますが、特別支援教育という特異な領域があるわけではない。安松幼稚園における特別支援教育は、一般的な教育全般における理念・考え・取り組みの同一線上・延長線上にあるという考えに、学校関係者も強く同意したく思います。

子供たちの心の育ち・人としてのあるべき姿・もの事に対する感受性を高め豊かにするという点において、安松幼稚園の情緒教育は、特別支援教育をも含んだ教育全般において、高い価値を持っていると評価します。

(2)安松幼稚園が情緒教育を目指しているという理念が、どこまで達成されているかという検証

十分に安松幼稚園が目指す教育目標が達成できているという、自己評価の記載が適正であると認めます。

- 多くの保護者から、
- ・ 自然を観察する眼が養われた
 - ・ 弟、妹に優しくなり、親にも感謝の言葉が出てくるようになった
 - ・ 挨拶や、周りの人を気遣う言葉が出るようになった
 - ・ 色々な物事に、勇気をもって挑戦しようという気持ちが強く出てきた

等の話を、よく耳にします。

幼稚園の HP “お母さんからのお便り” の中の H28. 2～3 さりげない優しさ・情緒が育ち の中に、上記のことが多く記されています。ここでは一編を紹介し、自己評価が適正であるとの傍証と致します。

平成 28 年 3 月

幼稚園児にここまで情緒が育つものかと

—— 子供が大人より五感で春を感じ うぐいすを見て 俳句を詠む姿は
まるで長老のようで 本当に幼稚園児かと思うぐらいでした ——

年中ゆり組 浅井留美子

いつも心之助がお世話になっております。

過日、子供が幼稚園のバス停に行く途中の公園で、ふと立ち止まり遠くの木を見上げていたので、どうしたのか聞くと、「きれ～い！ 白いお花が咲いたね。昨日は咲いてなかったのに。暖かくなってきたからお花が咲いたんだね」と。

私はいつも急ぎ足で、全く目にも留まっていなかった木に、白い木蓮の花がたくさん咲いていました。そして少し歩き始めると、近くの木にうぐいすが三羽止まり、私が「あ、うぐいす」と言うと、心之助が大きな声で

「うぐいすや ちょいと来るにも 親子連れ」と俳句を詠んで、
「ママ、春が来たね～。気持ち良いね～」と言って、軽やかな足取りでバス停に向かいました。

朝の小さな一コマなのですが、子供が大人より五感で春を感じ、うぐいすを見て俳句を詠む姿は、まるで長老のようで、本当に幼稚園児かと思うぐらいでした。(笑)

まだ 5 歳少しの子供が、これだけの感性と表現が身に付いて育ってくれている事を嬉しく、俳句を幼稚園で取り入れてくれる事は、知識として学ぶという事だけではなく、感性・情緒をも磨き育ててくれているんだなど。

家ではなかなか学べない事を教えて下さる安松幼稚園、その先生方の熱心なご指導に、改めて感謝しました。

Ⅲ. 次に特別支援教育についての自己評価の検証

安松幼稚園の保護者の想い

- ・幼稚園が、公教育を担っている責務として、障害児を受け入れ、特別支援教育を大切にしている点を、まず評価致します。
- ・園内で多くの勉強会をもち、研修にも参加され、専門的な知識の吸収に努められていることをお聞きし、高く評価致します。
- ・私達も、障害児が一般の教室で多くの園児と一緒に生活する（インクルーシブ教育）ことによって、お互いの理解が進み、優しさが育まれる様子を随分と見てきました。そういう空気が園全体に流れているので、参観日など、安松の保護者には、自分の子供だけでなく他の子供をも応援し感動する心が育っています。
- ・それ故、障害児をもつ保護者の方の中には、集会など多くの保護者の前で、自分の子供の様子をはっきりと述べる場合があります。そういう行動に対して、理事長先生が、「一人の人間として、敬意を表します」と発言されるのも、安松の園風と思え、保護者としても安松幼稚園に対して誇りを感じます。
- ・感想④にもありましたが、障害児の保護者の中には、市の保健センターなどの検診時に、「安松幼稚園ではなく、保育所や公立幼稚園を勧めます」と、言われることが多々あると聞いています。専門性をもっている方のそういう発言に、多くの保護者は悩まされています。しかし実際は、安松幼稚園に来園し、特別支援教育について園の先生と話をしたこともないとのことで、どこから、そういう事実に基づかない発言が出てくるのかと、憤りさえ感じます。
- ・「入園前まで、うちの子供は、外出先で走り回るの、外に出て行くことが苦痛であり、なかなか出かけられなかった。が、入園後しばらくすると、かなり改善され聞き分けがよくなり、家族で外出できるようになった。外でも家でも育てやすくなりました。」との声を、多く聞きます。

検証

私達自身の安松幼稚園での経験、上記の安松幼稚園の保護者の想い 等々から、特別支援教育に関する自己評価が適切であるとみとめます。

Ⅳ. 最後に

理事長先生は、
学校は教師力で決まる 教師力とは先生の熱意と指導力 それらが安松幼稚園の誇りと、よく言われます。

安松幼稚園では、先生の熱意と指導力が、子供の豊かな感性を引き出してくれています。教育全般そして特別支援教育においても、きちっと成果を出され、保護者の信頼も厚いものがあります。

以上より、私達はここに、自己評価は適切であるという学校関係者評価を提出致します。

付記：

文中に一部記しましたが、一私立幼稚園が、これだけ障害児教育に正面から取り組み、

専門医や心理士さんからも高い評価を受け、保護者の厚い信頼と感謝を得ているにもかかわらず、市の施設である保健センターに係わる一部の方から、事実に基づかない、いわれなき誤解を受けていることに、心穏やかではありません。

むしろ反対に、市からは、大きく感謝されるべきと考えます。

非常に大きな問題であると考えましたので、ここに私達の想いを付記致しました。